

ウイルスによる病害「トルコギキョウ葉巻病」が県下で初発生

2011年2月に県南部の施設栽培されていたトルコギキョウでトルコギキョウ葉巻病が県下で初めて確認された。病原は2006年より県下で被害をもたらしているトマト黄化葉巻病と同じウイルスである。タバココナジラミが媒介するため、媒介虫の防除対策が必要である。

内 容

1 発生の状況

2011年2月に県南部の施設栽培されていたトルコギキョウで生長点付近の葉が巻き、節間が縮み、葉脈が隆起した株が発見された(写真1)。



写真1：生長点付近の葉巻症状(わき芽にも見られる)

生長点付近の葉からDNAを抽出し、遺伝子診断を行ったところ、トマト黄化葉巻病ウイルス(TYLCV: *Tomato yellow leaf curl virus*)が検出されたため、トルコギキョウ葉巻病と診断した。

TYLCVには遺伝子型の異なる系統があるが、遺伝子診断で確認したところイスラエル系統長崎型であった。発病したトルコギキョウは定植からすでに半年近くたっており、苗による持ち込みか否かは不明であった。

同地域内での他の発生は確認されなかったため、被害は1戸で止まったと考えられる。

同病害は兵庫県内では初めての発生であったため病害虫発生予察特殊報第2号を発表し注意喚起を行った。

同じウイルスが原因で起こるトマト黄化葉巻病は

2006年度に県下で初めて発生し、その後県南部を中心に12市1町に発生を確認している。

2 病害の特徴と防除対策

このウイルスはタバココナジラミ(写真2)の吸汁により媒介される。土壌伝染、種子伝染、ハサミによる管理作業による汁液の移動では伝染しない。その防除対策は病株(ウイルスの二次伝染源となる)の抜き取り 媒介虫であるタバココナジラミの防除が重要となる。

タバココナジラミの薬剤防除が一般的であるが、薬剤抵抗性の問題などで困難である。そのため、施設への飛び込みを防ぐ防虫ネットが有効である。しかし、体長約1mmと微少な害虫であるため防虫ネットの目合いは0.4mmにする必要がある。

病害診断上の注意事項

症状はトマト黄化葉巻病に比べ、縮葉や黄化などは弱く、高温期の水分ストレスによる焼け症状と勘違いされるケースもあり注意が必要である。

松浦 克成 (環境・病害虫部)

(問い合わせ先 電話: 0790 - 47 - 2448)



写真2 TYLCVを媒介するタバココナジラミ成虫(体長約1mm)